

# 地方教育機関の挑戦

## —京都府山城教育局の子どもの読書活動推進事業—

中 里 隆 憲

### 1. はじめに

平成13年12月12日、「子どもの読書活動の推進に関する法律」（以下、読書活動推進法）が制定され、この法律の第8条もとづき、翌14年8月2日に「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」が閣議決定された。

これを受けて、京都府教育委員会（以下、府教委<sup>1)</sup>は、読書活動推進法第9条第1項の規定に則り、京都府における子どもの読書活動を総合的かつ計画的に推進するために、平成16年3月、「読書ではぐくむ 京の子ども夢・未来「京都府子どもの読書活動推進計画」」（以下、府推進計画）を策定した。

府推進計画にもとづき、京都府教育庁（以下、府教育庁）の所掌事務の一部を分掌する地方機関としての各教育局<sup>2)</sup>において、それぞれに読書活動推進のためのフォーラムを開催することになった。本稿は、京都府山城教育局（以下、山城教育局）におけるその取組みの経過を紹介するものである。

山城教育局が所管する地域は、宇治市以南、大阪府・奈良県・三重県・滋賀県の府県境までで、管内の小・中学校の学校数と児童生徒数は、

小学校	80校	児童数	32,322人
-----	-----	-----	---------

中学校	33校	生徒数	13,441人
-----	-----	-----	---------

である。管内には、他に京都府立学校が14校、公立幼稚園が26園ある<sup>3)</sup>。児童数は、京都市を除いた京都府内小学校の47.1%、生徒数は京都府内中学校の42.5%である<sup>4)</sup>。

### 2. 平成16年度の取組み

平成16年度の「やましろ子どもの読書活動推進フォーラム」は、11月21日、午後に久御山町ふれあい交流館「ゆうホール」において227名の参加を得て開

催された。フォーラムは、子どもたちが積極的に読書に親しみ、生涯にわたって読書習慣を身につけることができるよう家庭や学校、地域社会が連携し、社会全体で子どもの読書活動の推進を図ることをねらいとした。

当日の内容は次の通りである。

(1) オープニング 大型仕掛け本「ドラゴン」 出演：劇団「ふたり」

(2) 実践発表

①「公立図書館と学校との連携」 発表者 久御山町立図書館長

②「読書ボランティアと学校との連携」

発表者 木津町立梅美台小学校読書ボランティア「プラムの会」

(3) 講演 ブックトーク「本は、楽しい！」

講師 京都府子ども読書活動推進会議座長 北畑博子氏

ホールの外側の通路やロビーを利用して展示コーナーを設けた。コーナーには、保育所（園）・幼稚園・学校における読書活動の様子や公立図書館（室）の活動の様子が写真を中心として展示された。展示に参加したのは総計42機関に達した。他に、府教委選定の「推薦図書 京の子ども110選」の実物本の展示がなされた。

参加者が227名であったことは大成功といえる。会場のホールに入りきれないほどの盛況であった。しかも学校関係者だけでなく、学校支援ボランティアやPTAの役員、公立図書館の司書などが大勢参加し、学校、地域、家庭の連携のもとに開催されたフォーラムといつてよい。

オープニングの大型仕掛け絵本を活用しての実演は、手づくりの仕掛け大型紙芝居や小物のBGMを駆使しての演技力と歌唱力で会場を魅了した。ある参加者は「読み手の話し言葉が優しく、心地よく聞くことができ、ストーリーの中にスーッと入っていくようなひとときでした。」と感想を述べていた。久御山町立図書館長の実践発表は、学校との連携による取組みの話が中心で、遠隔地の小学校の児童はバスによる送迎もしているとの発表に、「遠隔地校へは、町のバスによる送迎が、配慮があるなあと思いました」と感想を述べる参加者がいた。読書ボランティアの実践発表は、地域でもよく知られた長年の蓄積がある団体の発表だけに、さまざまな読み聞かせや読書集会などについて、ブラックシアターや実演を交えてわかりやすく楽しく発表した。参加

者には読書ボランティアに対する理解が深まり、「府内の各学校にこのような活動が広がれば、図書館教育としての大きな効果があるのではないかと思います」と期待を膨らませる声があった。

講演は、講師がブックトークに関しては豊かな経験と実績のある方であり、実演を交えながらポイントをうまくまとめておられ、「ブックトークをはじめて見ました。参考になりました。」「大人でも興味をくすぐられるような内容で、子どもたちにも是非紹介してみたいです。」との感想があった。

展示コーナーも興味と関心呼び、「各市町村、学校の取り組みが一目で分かり、効果的でした。ほんの一部でしょうが、良かったです。」や「110選の本の展示バージョンにびっくりしました。本の表紙が見えるように置いてあると、手にとって見たくくなります。」との声が寄せられた。実物本の展示には多くの図書館の協力を得たが、その甲斐があったといえよう。

平成16年度のフォーラムについては、展示を含めた内容に関して、アンケートは概ね好評であった。図書館や幼稚園・学校、PTA、ボランティアなど幅広い交流の場となったことは、今後につなげていくための大きな成果といえる。これからの子どもの読書活動を推進していくにあたって多くのヒントが得られた有意義なフォーラムであったと総括できよう。

### 3. 平成17年度の取組み

新しい年度になって、山城教育局では、管内の児童生徒の個に応じた学習支援や学力充実・向上の基盤づくりのために、総合的な施策を講じることとなり、題して「やましろ未来っ子」支援事業として、次の三つの事業を展開することになった。

#### (1) 公立学校ジョイントアップ事業

- ・小・中・高連携の推進…指導者連携、児童生徒間交流
- ・学力充実・向上を目指す小・中連携…カリキュラム等に関する研究・開発

#### (2) 子どもの読書活動推進事業

- ・ファミリー読書月間の推進
- ・司書教諭等研修会の実施
- ・子どもの読書活動推進フォーラムの開催

### (3) 学生パワー活用事業

- ・教職や臨床心理士を目指す学生の学習支援ボランティアとしての活用  
少人数授業等、授業中の支援  
放課後や長期休業中の補充学習での支援

学生パワー活用事業では、司書教諭資格の取得を目指している学生に実際に学校図書館での経験を積む機会として活用させることについて了解を得て筆者の担当講座の学生に呼びかけた。

「子どもの読書活動推進事業」は、前年度の読書活動推進フォーラムに加えて「ファミリー読書月間」の設定と「山城地方学校図書館司書教諭等研修会」の開催、さらに「やましろ子どもの読書調査」の実施に拡大して取り組むことになった。

「ファミリー読書月間」は子どもの読書習慣の形成を家族ぐるみで図ることを目的とし、司書教諭等研修会は子どもの読書活動を推進するため司書教諭の専門性の向上を図ることを目的とした。また、「やましろ子どもの読書調査」は、結果を比較検討することによって全国的な視点からながめることができるように配慮しながら、管内の児童生徒の読書活動の実状を把握し分析することによって読書活動の活性化に資することをねらいとした。

この拡大された「子どもの読書活動推進事業」を取り組むにあたって必要な事項について協議するために「山城地方子どもの読書活動推進協議会」（以下、「推進協議会」という）が設置された。協議会の構成は、次のようである。

学識経験者 行政関係者 学校関係者 PTA 関係者 図書館関係者

行政関係者は山城地方各教育委員会教育長の代表、学校関係者は小・中・高の校長の代表と幼稚園長の代表、PTA 関係者は小・中学校の PTA 会長の代表と幼稚園 PTA 会長の代表、図書館関係者は公立図書館長の代表である。推進協議会議は、合計 4 回開催して関係事項についての協議とファミリー読書月間の作品審査などにあたった。なお、本稿は推進協議会に提出するために事務局において作成した資料をもとにまとめたものである。

以下に、各事業の取組みを概括しておく。

「やましろファミリー読書月間」は、8月1日から8月31日までに設定した。この間に、親子・兄弟姉妹、祖父母など、家族で読み聞かせをしたり、



授業の中で図書を上手く利用した授業をされていて、子ども達が生き生きとしている感じでした。そのためには、司書教諭がきちんとした年間計画を立てて、目標を持たなければならないなあと思いました。参考になりました。」。講演については、「学校図書館法、司書教諭の役割、学校での図書館教育の定義等を再確認することができました。現場でどのように進めていくべきか考えたいと思います。」「ビデオで司書教諭のあり方が大変分かりやすかったです。特に読書のアニメーションやレファレンスの言葉自体知らなかったので参考になりました。」

「やましろ子どもの読書調査」は、5月と8月の状況について実施した。調査内容は読書量や図書館の利用状況など全国学校図書館協議会の調査に準じて実施した。調査対象は小学校4・6年と中学校2年生の20%を抽出し、8月調査では、5月調査で対象とした児童生徒に対して同じ質問（設問数は約半数）によって行った。

調査結果の要点をまとめると、次の通りである。

- ①5月に児童生徒が読んだ本の平均冊数は、全学年で全国平均（平成16調査）を下回っている。また、8月調査では、小4を除いて5月調査を上回っている。

		山城	全国		山城	全国
小4男子	5月	8.2冊	8.7冊	小4女子	9.4冊	10.8冊
	8月	7.1	8.6			
小6男子	5月	3.6	4.5	小6女子	4.2	6.8
	8月	3.9	5.1			
中2男子	5月	1.8	2.5	中2女子	2.1	3.3
	8月	3.3	2.7			

- ②学校図書館から本を借りる回数は、学年進行とともに減少し、「借りない」と答えた生徒は中2では3分の2に達する。

	借りない	年2~3回	月1回	月2~4回	月5回以上	無回答
小4	5.3%	17.0	21.8	39.6	16.0	0.3
小6	17.3	41.3	23.9	13.0	3.4	1.1
中2	67.0	19.0	6.9	4.2	1.1	1.9

③ 8月の「ファミリー読書月間」に「本の内容について家族と話した」

児童生徒は、中2で2割を超え、小4では4割に達している。

	小4	小6	中2
本の内容について家族と話した	40.1%	25.1	21.0

平成17年度の「子どもの読書活動推進フォーラム」は、10月2日の午後に宇治市文化センターにおいて574人が参加して開催された。このフォーラムはねらいを子どもたちが積極的に読書に親しみ、生涯にわたる読書習慣を身に付け、山城地域における先進的な実践や活動を学ぶとともに家庭や学校、地域社会が果たす役割について理解し認識を深めることにおいた。

当日の内容は、次の通りである。

#### (1) 実演

- ①ブックコンサート 城陽市南部コミュニティーセンター図書室職員  
城陽市立深谷小学校PTAサークルおはなしの泉
- ②山城のむかしばなし絵巻 精華町立図書館職員
- ③読み聞かせ劇場 同志社女子大学サークル  
「アンデルセンこぼなしの会」
- ④ブックコマーシャル 宇治子ども文庫連絡会
- ⑤本のお医者さん 宇治・本の修理ボランティア

#### (2) ホールでの発表

- ①オープニング 大型紙芝居「じごくのそうべい」  
宇治子ども文庫連絡会「南陵子ども文庫」
- ②実践発表 読書を通じて、心豊かな生徒の育成めざして  
一学校（園）・家庭・地域の連携をふまえて—  
宇治田原町立維孝館中学校
- ③講演 おはなし「ストーリーテリング」の楽しみ  
神戸親和女子大学講師 芦田悦子氏

#### (3) 展示

- ①特色ある取組みの展示

山城地域の各学校、PTA、公立図書館、ボランティアなどの特色あ

る読書活動の様子を展示

②「ファミリーしおり（栞）コンクール」応募作品を展示

ブックコンサートは、大型絵本「月曜日にはなにたべる」、影絵「わたしのワンピース」「ほくにピアノがひけたら」、パネルシアター「星空のどうぶつえん」で構成されていた。組み合わせがくふうされていたため、感銘が深かったようである。「すごく楽しかった。音と視覚でイメージが豊かになる」「お話を音楽をつけてイメージを膨らませる「ブックコンサート」とてもよかったです。」「音楽が入っていて、幻想的な世界に誘ってもらえるし、絵本がより大きく見えました。」など参加者から感動の声が寄せられた。

「山城のむかしばなし絵巻」は、宇治田原町の禅定寺に伝わる昔話「ころころ・ころ柿」と山城町の蟹満寺に伝わる昔話「かにのおんがえし」の二つで、山城地方に伝承されてきたよく知られた話が美しい手作りの絵巻に仕立てられていた。参加者からは「絵も美しいですし、話の進み具合や場面によって画面を大きくとったり、とてもおもしろかったです。紙芝居とはまた少し変わっていて非常に興味深かったです。」「絵がすばらしく良かったです。作品を作るには出版社の了解（著作権）がいることがわかりました。」など感動と学びの声が寄せられた。

「読み聞かせ劇場」は、「いやだ いやだ」「ぼちぼちいこか」「ずーっとずっとだいすきだよ」などが、6名の大学生によって演じられた。ロビーでの実演だったので少々さわがしかったが、「手遊びで子どもたちがノリノリだった。」とか「子どもたちが一生懸命聞いている姿が可愛かったです。」の声や「同志社女子大学のお姉さんたちが元気で楽しく、このような若いボランティアの方が増えて欲しいと思いました。」との若いボランティアに期待する声が聞かれた。

ブックコマーシャルは、絵本や童話と出会う幼児期の子どもたちや本に手を伸ばしてほしい小学校高学年や中学生を対象にしたパネルシアターを使つての本の紹介であった。参加者の声を拾うと、「最初に人をひきつける仕掛けがありビックリしました。内容がとても楽しく本当にその本の続きが読みたいと思わせるものでした。」「吸い込まれるようなお話で、あれも・これも読んでみたくくなりました。手作りのパネルにお話下さった方の熱意を感じまし



た。」「とてもよい方法だなあと思いました。また、こんな方法で本を紹介していきたいです。ブックコマーシャルという名前もいいですね。」などの声があった。

「本のお医者さん」は、文字通り大切な本が傷んだときの修理の仕方である。本の修理という地味な作業の実演であったが、本を大切にしないではその共感が広まったようである。実演されている方にいろいろ質問できたこともよかったとの感想があった。

実演全体については、「読書活動の手法やヒントを多く学ぶことができた。」「大人も子どもも楽しめるフォーラムであった。」「読書について意識の高まりを感じることでできる内容でした。嬉しいフォーラムでした。」などの好意的な評価が多かったが、ホールでの発表との時間配分が十分に考慮されていなかったこと、参加者が多くて会場が狭く感じられたこと、特に展示と実演の場所の配置にくふうの余地があったこと、会場内の案内が行き届いているとはいえなかったことなどの改善を要することや反省すべき点などの課題もあった。

ホールでの発表のオープニング「じごくのそうべえ」は、めくり絵の語り部、めくり役総勢8人による大型紙芝居である。アイデア満載の紙芝居で、「迫力のある紙芝居で音響、語りとも勉強させてもらった。とても楽しい一時でした。子どもたちと鳴り物を工夫してやってみたいなあと思いました」とか「とても迫力があってお話に引き込まれていきました。効果音が上手く使われていてとても素晴らしかった。」などの感想が寄せられた。

実践発表は、文部科学省の「生きる力をはぐくむ読書活動推進事業」の地域指定を受けているところの発表で、地域が一体となって読書活動に取り組んでいるようすが生き生きと報告された。総合的な学習の時間に生徒たちが取り組んだ「読み聞かせ」も実演で紹介された。参加者の「保育所、幼稚園、小学校、中学校と町全体のことを話してくださりよかったです。また、手作りの紙芝居等の積極的な取組が素晴らしいと思いました。」「維孝館中(学校)の生徒の皆さんの発表は素晴らしかった。自分たちが環境問題をテーマに紙芝居を作ったのは素晴らしいことです。インタビューも素直な感じがとても好感が持てた。こんな取組が他の中学校にも広がれば素晴らしいですね。」と

いった高い評価が寄せられた。

講演については、「ストーリーテリングって何とって思っていました、とてもよくわかりました。」「ストーリーテリングをやり始めたばかりでした。講演を楽しみにしていました。子供が聞く力、読む力をつけるよう図書館司書として力添えしていければと思います。」「ストーリーテリングは絵本をみながらの読み聞かせより、想像しながら楽しめましたが、イメージができていなければお話を楽しめないこともよくわかりました。また、子どもにとって「ことば」感覚がどれだけ大切か納得しました。」などの感想があり、参加者のストーリーテリングに対する理解がより深まったようである。

展示は、山城地域の各学校、PTA、公立図書館、ボランティアなど特色ある読書活動のようすと「ファミリーしおり（栞）」応募作品の展示であった。前者の展示については、「学校の様子や図書館の活動の様子がわかって参考になった。活動の参考にしたい。」「各校ボランティアの方がおられて、いい環境になってきたなあと思います。図書館が楽しい時間のスペースになると嬉しいです。」の感想があった。「ファミリーしおり（栞）」の展示については、「素敵な作品がたくさんありました。また、栞を見て「この本、読みたいな」と感じたものもありました。じっくり見られなくて残念です。」「色々工夫された栞がたくさんあり、子どもの力ってすごいなと思いました。8月にファミリー月間というのも夏休みで家中で読書できて良いと思います。」などの声があった。応募のあった全作品の展示であったが、数が多くてじっくり見ている時間がなかったようで、審査をするための展示にはくふうが必要のようである。

平成17年度の取組みは、読書調査で子どもたちの読書実態を把握することから始まり、1か月の平均読書冊数が全国平均をやや下回っていることが明らかになった。また、8月の「ファミリー読書月間」後では、1か月の平均読書冊数が小学校6年生と中学2年生とで5月調査を上回っていることもわかった。山城地域の各学校が積極的に取り組んだ証であろうが、取組みが一定の成果に結びつくことがはっきりしたことの意味は大きい。

初めて実施した司書教諭等研修会も、169人の参加が得られことは、次年度以降の継続開催の必要性が示されたものと言えよう。10月の読書活動推進フォー

ラムは、実演コーナーを新たに設けて拡大開催した。そのためホールでの発表や展示との時間帯調整、会場設定のくふうなど検討課題を残したが、これは574人と参加者が多かったことにも起因しているといえよう。

#### 4. 平成18年度の取組み

新しい年度になって、子どもの読書活動推進事業を実施するにあたり事業全体の目的を「学校・家庭・地域社会が連携して・協力して、総合的な読書活動の推進体制を整備し、子どもの読書活動を活発にし読書習慣の形成を図ることにより、学力の充実・向上の基盤づくりを推進すること」に定め、さらに年度の重点目標として以下の4項目を掲げた。

- (1) 子どもの読書活動の実態を的確に把握し、解決すべき課題の明確化を図る。
- (2) 一つ一つの事業のねらいを明確にし、子どもの育ちにつながるよう内容の充実を図る。
- (3) 各事業の内容に連続性を持たせ、事業全体で子どもの読書活動を推進させる。
- (4) 子どもの読書活動推進事業への参画者の裾野を広げる。

事業内容としては、前年とほぼ同じであるが、新たに進展を図ったところや新しい事業についてまとめておく。

「山城地方子どもの読書活動推進協議会」は、小・中学校の司書教諭に一人ずつと高校のPTA代表の3名を加えて12名で組織することになった。「やましろファミリー読書月間」では、啓発活動を通して機運の高揚を図ることをねらいとして、キャッチフレーズを募集することにした。「やましろ子どもの読書調査」では、調査対象に高校の2年を加えることとした。「やましろ子どもの読書推進フォーラム」では、声を出して読むことを通して本を読む楽しさや日本語の美しさを体感し、読書への意欲を高めるとともに、言葉への関心を高め、国語力の基礎を培うことをねらいとして、「声を出して読もう！ in 京都〈やましろ〉」をも含めて開催することとなった。内容は、古典の暗唱や音読の発表が中心である。

府教委では、府民みんなで読書活動を推進する社会的機運を盛り上げ、子どもたちがより本に親しみ豊かな心を育むことをねらいとして、平成18年1月28日から「みんなで読もう！1000万冊読書キャンペーン」（以下、1000万冊読書運動）を展開している。実施期間は2年程度の予定である。実施方法は、専用 HP の <http://Kyoto-book1000.jp/> にアクセスして年代や居住地域、読んだ本のジャンルを選んで入力することによって、府民誰でもが参加できる。特に学校は府教委から個別の ID とパスワードを取得することによって学校単位で参加できるようになっている<sup>5)</sup>。なお、平成19年4月30日現在の読書冊数の累計は、6,510,783冊に達しているが、幼稚園から高校までの読書冊数が全体の98.8%を占めている<sup>6)</sup>。いかに学校教育に期待するところの大きい読書運動であるかが汲み取れる。

山城教育局では、1000万冊読書運動への積極的な参加を啓発することで府民の機運を高めるために、平成18年度の「子どもの読書活動推進事業」の各取組みを通して参加への啓発をしていくこととした。さらに、学校における具体的な取組みとして「やましろの計画」を策定した。まず「やましろの目標」を2年間で500万冊とし、この目標達成のために「平均読書冊数プラス1」を掲げ、小学1～4年は月に12冊（週に3冊）、小学5～6年は月に8冊（週に2冊）、中学生は月に4冊（週に1冊）とした。すべてのやましろの子どもがこの目標を達成すると、1ヶ月に約40万冊読破することになる。平成19年5月現在のやましろの登録数は約276万冊であり、月40万冊の目標を積み上げていくことによって、平成20年1月までに500万冊に達することを目標とした。

平成18年度の「やましろファミリー読書月間」は、期間設定を8月1日から8月31日とし、啓発のキャッチフレーズの募集から始まった。ファミリー読書月間の趣旨にそって家族といっしょに読書する楽しさを短い言葉や文で表現したキャッチフレーズの募集で、応募資格を山城地域の小学校4年以上の児童生徒と山城地域に居住または勤務している方として募集したところ、1024点の応募があった。事務局で予備選考して、推進協議会委員会が審査にあたり、最優秀賞2作品、優秀賞8作品、佳作若干点を決定した。最優秀作品の2点は、「ねえ教えて！子どもの時どんな本が好きだった？」「伝えたい我が子に読書の感動を！」である。

「ファミリーしおり（葉）コンクール」は、8月7日から9月7日までの期間で募集したところ、幼稚園・保育園等から313点、小学生1,730点、中高生386点、合計2,429点の応募があった。前年に比較して536点の増加である。応募作品が多かったため、まず一次審査を事務局で行い、さらに入選作品を「やましろ子どもの読書活動推進フォーラム」会場において展示して参加者に投票してもらい、その結果を参考にして推進協議会において最終審査し、受賞作品を決めることにした。表彰は、山城教育局長賞4点、推進協議会長賞4点、優秀賞12点、佳作若干とした。

「やましろ子どもの読書調査」は、5月15日～6月14日と8月1日～8月31日のそれぞれ1か月間について、小4・小6・中3・高2の児童生徒の約20%にあたる3,367人を抽出して実施した。概要は、次に通りである。

5月調査では、

①1ケ月の平均読書冊数は、いずれの学年でも全国平均以上を示した<sup>7)</sup>。

また、前年と比べて0.8冊（中2）～3.2冊の増加がみられた。

小4	10.4冊	全国比±0	前年比+1.6
小6	7.1冊	全国比+1.7	前年比+3.2
中2	2.9冊	全国比+0.2	前年比+0.9
高2	1.7冊	全国比±0	

②「本を読む場所」「本の入手方法」の調査から、家庭が子どもの読書に大きな役割を果たしていることが判明した。

・本を読む場所

	小4	小6	中2	高2
自室	26.8%	28.6	32.3	39.2
居間	20.8	21.6	18.6	18.0

・本の入手方法

	小4	小6	中2	高2
家にある本	23.9%	20.9	18.6	15.0
家族に買ってもらう	23.9	20.9	18.6	15.0

③読書量、読書時間ともに男女差が大きい。また、読書量は学年が進むにつれて減少し、反対に読書時間0分は増えていく傾向にある。

・ 1ヶ月の平均読書冊数				
	小4	小6	中2	高2
男子	9.6冊	6.8	2.1	1.6
女子	11.1	7.4	3.6	1.9
・ 1ヶ月の読書冊数0冊				
	小4	小6	中2	高2
男子	6.6%	12.8	22.8	49.3
女子	1.6	4.5	8.9	28.3
・ 1ヶ月の読書冊数10冊以上				
	小4	小6	中2	高2
男子	33.7%	15.8	2.7	2.7
女子	43.4	21.9	4.3	3.3
・ 1日に本を読む時間が0分				
	小4	小6	中2	高2
男子	12.2%	12.8	21.7	43.5
女子	2.4	6.0	12.0	35.6

8月調査では、

- ①8月の平均読書冊数は、小学校で前年の8月の平均読書冊数を上回った。高2は平成18年度より実施であるが、5月の1.7冊を上回り8月は2.1冊であった。

	小4	小6	中2	高2
平成17. 8	7.9冊	4.5	3.0	
平成18. 8	9.6	6.5	2.4	2.1

- ②5月調査と比較して、本を1冊も読まなかった子どもは、中2を除いた全学年で減少した。また、読書時間0分の子どもは全学年において減少した。

・ 1ヶ月間に1冊も本を読まなかった子どもの割合				
	小4	小6	中2	高2
平成18. 5	4.1%	8.8	15.9	44.7
平成18. 8	3.0	6.0	17.6	23.9

・ 1日に「本を読む時間」が0分の割合

	小4	小6	中2	高2
平成18. 5	7.4%	9.4	16.9	39.0
平成18. 8	2.1	4.4	9.3	18.6

③読後に「本の内容について家族と話した」は、8月調査で5月と比べて1%程度の増加がみられた。

全般的にみて、平均読書冊数が全国平均を上回りつつあること、子どもたちの読書が家庭や家族とのかかわりが密接であることを示す調査となったことの意味は大きいといえよう。

「山城地方学校図書館司書教諭等研修会」は、学校図書館や司書教諭等の果たす役割について理解を深め、学校図書館の活性化を図るために開催している。平成18年度は、8月23日に宇治市の生涯学習センターの大ホールを会場とした。参加者は、186名で、そのうち、学校図書館支援ボランティア22団体63名、ボランティアを含めての公立図書館7館から19名の参加があった。内容は、以下の通り。

(1) 実演と指導

読書サークルごんぎつね 友繁惇子氏

実演：「川とノリオ」の朗読

指導：朗読のポイント

(2) やましろ子どもの読書調査報告

5月読書調査の結果から一児童生徒の読書活動の現状—

山城教育局指導主事

(3) 実践報告 やってみよう！図書館教育の校内研修会

城陽市立西城陽中学校 司書教諭

(4) 講演 生きる力と学校図書館

—インフォメーション・パワー（米国学校図書館基準）を参考に—

京都女子大学非常勤講師 平井むつみ氏

参加者の声を聞いてみると、「実演と指導」については、「表現豊かで聞いていて心に迫るものがあった。」「朗読のポイントを教えてもらったので明日から実践してみようと思った。」など。読書調査の関しては、「子どもたちが

少しでも読書に親しんでくれる傾向にあるようで素直にうれしい。」とか「家庭と読書が密接に関わっているということがよく分かった。」などであった。実践報告には、「核心をつきながら、しかもユーモアや具体例に富んだ校内研修の内容(資料)が素晴らしい。」「講師の先生の熱い思いがヒシヒシと伝わってきた。私もがんばってみたい。」など。なお、発表者は、平成18年8月9日に第35回全国学校図書館研究大会(郡山大会)の分科会「校内研修をどう進めるか」で報告して好評を得ている。講演に対しては、「情報を活用できる子どもを育てるために、今後も工夫をしていきたい。具体的でわかりやすかった。」「新しい“ことば”との出会いでした。とても勉強になりました。」などの感想が寄せられた。参加者には、収穫の多い研修会であったようである。

平成18年度の読書活動推進フォーラムは、「やましろ子ども読書推進フォーラム・声を出して読もう！ in 京都〈やましろ〉」として、声を出して読むことを通して本を読む楽しさや日本語の美しさを体感し、読書への意欲を高めるとともに、言葉への関心を高め、国語力の基礎を培うことをも含めて、10月22日の午後、久御山町中央公民館において開催した。参加者は675名に達した。概要は、次の通り。

(1) 声を出して読もう！ in 京都〈やましろ〉

- ・児童生徒による音読・朗読の発表
- ・公演：六嶋由美子氏による「ものがたり」

(2) 読書ボランティアミニシンポジウム

(3) 実演・交流の広場(5つの部屋で9団体が日ごろの活動を実演で紹介)

(4) 特色のある取組みの展示

(5) ファミリーしおり(栞) 入選作品の展示と参加者による投票

なお、会場において「やましろファミリー読書月間キャッチフレーズ」や「みんなで読もう！1000万冊読書キャンペーン」の表彰を行った。

まず、「声に出して読もう！ in 京都〈やましろ〉」は、以下の通り。

①小学生の音読

木津町立梅見台小学校児童による音読

- じゅげむ
- 「わたしと小鳥とすずと」(金子みすゞ 作)



○「ふしぎ」（金子みすゞ 作）

○平家物語（冒頭）

②中学生の朗読

宇治市立宇治中学校生徒による朗読

○「スイミー」（レオ・レオニ 作）

○「あの坂を上れば」（杉みき子 作）

③高校生の朗読

京都府立西宇治高校徒による朗読

○「古都」（川端康成 作）

④六嶋由美子さんの「ものがたり」

○大型しかけ絵本「まほうのどうくつ」

参加者のアンケートに示された感想や意見をみると、子どもたちの発表については、「小・中・高生の音読、朗読が上手だった、すばらしかった」などの声が多数あり、「子どもたちが発表する姿に心打たれた」「日本語のすばらしさを感じた」などもあった。六嶋由美子氏の「ものがたり」については、「すばらしかった。引き込まれた。」と感動を率直に述べた感想が多かった。「自分の活動に生かしていきたい。」というのもあった。こうした取組みについて「この取組みはこれからも続けてほしい。」との要望があった。「テーマやコンセプトをはっきりして開催すべき」とか「迫力のある群読も聞かせてほしいかった」などの意見も寄せられた。

次に、「読書ボランティアミニシンポジウム」は、テーマを「～子どもと本をつなぐボランティアパワー～読書ボランティアの果たす役割」とし、シンポジストは、幼稚園 PTA、小学校図書館ボランティア、中学校図書館ボランティア、町立図書館読書ボランティアの皆さんにお願いし、ゲストシンポジストに六嶋由美子氏を迎え、コーディネーターは小学校の校長があたった。多角的に活発な意見交換や発言が交わされた。参加者アンケートは、学んだことの内容を具体的に記入しているものやボランティアが行っている日常活動への好意的な評価が多かった。「ボランティアの姿が励みになって、やる気が出た。」との声や「市町村等でボランティア養成講座をしてほしい。」との要望もあった。

実演・交流の広場では、ホールでステージ発表が行われた。前半は城陽市

立図書館ボランティア「城陽おはなしサークル」が、OHPを使って「花さき山」（作：斉藤隆介、絵：滝平次郎）を語り、次いでスウェーデンの民話「三つの望み」とグリム昔話「おいしいおかゆ」をストーリーテリングで語り聞かせた。後半は宇治市図書館サークルの宇治の語り部「かわせみ」が地域に伝わる三つの民話を語った。

会議室や研修室を使つての実演・交流の広場のうち、「読み聞かせの部屋」では、まず木津町立木津小学校のPTA読書ボランティア「たけのこクラブ」が長新太作「かえるとカレーライス」など三作を取り上げ、次に井手町立井手小学校PTA「読み聞かせボランティア」が大型絵本と二作の読み聞かせをした。

「朗読・ストーリーテリングの部屋」においては、初めに京田辺市立中央図書館ボランティア「おはなしバスケット」が二つのストーリーテリングを語った。次に八幡市立図書館のボランティア「朗読サークルよむよむ」が藤澤周平作の「夜の雪」と志賀直哉作「転校生」を朗読した。

「パネルシアターの部屋」では、前半に精華町立図書館読書ボランティア「おはなしのこぼこ」がパネルシアターを二つ演じ、後半には城陽市立寺田西小学校の読書ボランティア「ぼたた」がパネルシアター、紙芝居、パックシアターをそれぞれ一作ずつ演じた。

「本のお医者さん」は、昨年同様に宇治市図書館ボランティア「本の修理ボランティア」が傷んだ本の修理を解説つきで実演してみせた。

参加者からは各ボランティアの実演・発表へ好評の声が多数あった。さらに、「今後やってみたいものに巡り会えた。」「ボランティアの実演・交流の場が大切だ。」「自分たちの活動の参考になった。」「来年もぜひこのコーナーを続けてほしい」などの前向きで意欲的な意見が寄せられた。また、「隣の部屋のからの音楽や音が邪魔になった」「出入口の辺りがうるさかった。」など実施にあたってくふう・配慮を求める声もあった。

展示部門には、

- ①PTA、読書ボランティア、公立図書館や小・中学校からの活動状況を伝える展示
- ②やましろ子どもの読書調査結果のパネル展示

### ③ファミリーしおり（葉） 入選作品の展示

「ファミリーしおり（葉）」については参加者による投票が行われた。参加者アンケートには、「本の紹介の仕方として、しおりも楽しいなと思った。」「本校では、もどってきた作品を図書室で展示している。」「親子協力の力作が集まっていて感心した。」「来年こそは…わが子にも応募させたい。いっしょに応募したい。」の声があった。本年度は、応募作品が多かったために一次審査を行ってその入選作を展示した。これについては「今年は、しおりの数が絞られていたので、選びやすかった」の声が多数あったが、「全作品を展示してほしい。入選しなくとも、展示してもらえただけでうれしい。」との意見もあった。また、「市町村持ち回りで展示できたらおもしろい。」と促す声もあった。

平成18年度の事業概要は以上である。これらの事業に取り組むにあたって、推進協議会は会議を5回開催して、関係事項についての協議や応募作品の審査などにあたった。

平成18年度の成果としては、

- (1) 読書調査や1000万冊読書キャンペーンの状況からみて、子どもたちの読書冊数が着実に増加しているといえる。
- (2) すべての事業において前年比で参加者・応募者ともに増加した。
- (3) PTA や学校図書館支援ボランティア・公立図書館ボランティアなどからの参加が増えて事業の裾野を広げることができた。
- (4) 各事業間に連続性を持たせて事業全体を継続的に積み上げることができた。
- (5) 「ファミリー（葉）」入選作の管内巡回を実施した。展示場所は、管内の図書館・公民館などの公立施設である。

また、課題としては、学年進行に伴う読書量の減少と、読書量・時間における男女差や個人差などの読書調査で明らかになったことへの対応が挙げられる。しかし、このことはいずれの読書調査においても多くの場合に指摘される課題であり、子どもたちの成長発達や社会環境にも起因しているところが大きく解決は至難であろうが、中学校にみられる落ち込みは看過してはならないとの受け止めは必要であろう。また、事業全体に対しての継続的な参

加促進の振興策の充実は欠かせないであろう。

## 5. 課題と展望

新年度になって「子どもの読書活動推進事業」が再び動き出そうとしている。平成19年度も関係機関や関係の皆さんのより大きな理解と協力を得て事業が進展し、子どもたちの読書活動が活発になり、より豊かになることを願っている。管内の各学校の取組み状況を見ると、すべての学校がこぞって事業に取り組むまでには至っていない。取り組んでいる学校においても取組みに濃淡の差がみられる。学校への、いっそうの裾野拡大が大きな課題として残っている。子どもたちが豊かな読書を取り戻すことの波及効果には計り知れないと思う。それは、ただ読書離れや活字離れの克服にとどまらず、学力向上をはじめとして直面している種々の教育課題の解決に向けて大きく寄与するものと確信している。

終わりに、山城地域の子どもの読書活動がいっそう進展することを願い、思うところについてまとめておきたい。

今回の事業の展開は関係機関の理解と協力を得て大きな成果として結実してきている。しかし、このようなイベント的な事業はできるだけ早い機会に事業がなくとも一般化し、定着していくことが望ましいことは言うまでもない。そのためには、まず各市町村が子どもの読書活動の基本計画を策定する必要がある。山城地域で策定済みのところは、文部科学省の平成18年5月調査によると<sup>8)</sup>、

八幡市、宇治田原町、木津町（現、木津川市）、加茂町（現、木津川市）に過ぎない。その後策定したところには、宇治市と久御山町があるが、多くの市町村はこれからである。

次に、学校内の推進体制を確立することである。そのために欠かせないのは、「学校図書館図書標準」の一日も早い達成であろう。平成15年度末の文部科学省調べ「市町村別学校図書館図書標準の達成校割合（公立）」によると<sup>9)</sup>、山城地域での達成率は、

75～50%      50～25%

小学校      井手町      宇治田原町・加茂町（現、木津川市）

で、他は小・中学校ともすべて25%未満である。京都新聞の報ずるところによると、山城4市の学校図書館の現状（2005年度）は、

		図書購入費 (1校平均、公費分)	蔵書数 (1校平均、100冊未満は切り捨て)
宇治市	小学校	7.2万円	5,900
	中学校	18.8	6,800
城陽市	小学校	47.7	6,500
	中学校	60.0	8,700
八幡市	小学校	55.8	6,200
	中学校	100.8	6,400
京田辺市	小学校	42.2	6,600
	中学校	93.3	7,400

「山城地域4市でも1校当たりの図書購入費に八倍近い開きがある」とのことである<sup>10)</sup>。文部科学省の「学校図書館の現状に関する調査結果について」（平成19. 4. 27）によれば、平成17年度末の学校図書館図書標準の達成学校数の割合は、

小学校 40.1%      中学校 34.9%

となっている<sup>11)</sup>。同省は、小・中学校の学校図書館の図書の充実を図るために「新学校図書館図書整備5か年計画」を策定し、本年度から5年間で「学校図書館図書標準」にまで引き上げる施策をスタートさせている。

次に触れなければならないのは、学校図書館おける人的体制の整備である。司書教諭の時間軽減と学校司書などの配置である。山城地域の小・中学校では司書教諭の全校配置は実現しているが、司書教諭が司書教諭としての役割を果たすためには時間軽減などの措置が不可欠である。また、山城地域における小・中学校の学校司書などの配置は、宇治市・久御山町・木津町（現、木津川市）などの一部に過ぎず、しかも勤務の実態には、複数校の巡回勤務など課題が多い。

平成5年4月1日から施行されている改正された「公立義務教育諸学校の

学級編成及び教職員定数の標準に関する法律」には、事務職員の定数について「学校図書館の重要性と事務量を考慮し、事務職員が図書館事務を分担できるよう複数配置の基準を引き下げ、27学級以上の小学校及び21学級以上の中学校に2人を配置できるよう措置」されている<sup>12)</sup>。今日では、このような学級数の小・中学校は皆無に等しいであろうが、教職員定数上からも学校図書館のための事務職員配置の必要性を認めたものとして重要視してよいであろう。なお、この改正において高等学校については「学校図書館の機能の充実に資するため学校図書館担当の事務職員の配置基準を引き下げ、12学級以上の全日制の課程及び定時制の課程に1人を配置できるように措置」されており、それが現在の高等学校における学校図書館担当事務職員（学校司書）の高い配置率になっているのである。

全国学校図書館協議会の「2006年度学校図書館調査報告」によると<sup>13)</sup>、学校司書が配置されているのは、

小学校 43.2%          中学校 42.0

このうち正規職員として採用されている割合は、

小学校 17.5%          中学校 21.8

さらに、配置されている学校司書の勤務形態は、

	専任	兼任	複数校勤務
小学校	73.4%	10.1	16.6
中学校	64.0	18.6	17.4

である。

平成14年8月に閣議決定された「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」には、学校図書館担当事務職員の配置について、

学校図書館を担当する事務職員は、司書教諭と連携・協力して、学校図書館に関する諸事務の処理に当たっている。今後、学校図書館の活用を更に充実するため、各地方公共団体における事務職員の配置の取組を紹介して、学校図書館の諸事務に当たる職員の配置を促していく。

とあり、さらに文字活字文化振興法は第8条（学校教育における言語力の涵養）の2において、国及び地方公共団体は、学校における言語力の涵養に資する環境の整備充実を図るため、「司書教諭及び学校図書館に関する業務を担

当するその他の職員」の充実等の人的体制の整備等に関し必要な施策を講ずるものとする事になっている。

学校における読書活動推進の体制を確立のためには、各学校の学校図書館の体制をまずしっかりと確立しておかなければならない。子どもたちの読書環境の整備・充実という点では、公立図書館の整備・充実も欠かすことができないことはいうまでもない。

国の「子どもの読書活動の推進に関する基本計画」は、「おおむね5年間にわたる施策の基本的方向と具体的な方策」を明らかにしたものである。現状からすれば、5年間の期限が切れ、これまで進められてきた施策が打ち切られてもすれば、「旧の木阿弥」になるに等しく、これまで積み上げてきた成果がすべて水泡に帰する恐れがある。山城教育局における読書活動推進事業も子ども読書活動推進法とそれに基づく推進計画が策定されていなければできなかった事業であろう。法律やそれを推進するための基本計画が存在する意味は、甚だ大きいことを再確認しておきたい。

本稿をまとめるにあたって、前山城教育局長（現京都府立図書館長）松田定氏、山城教育局指導主事辻村敬三氏をはじめ、多くの方々のご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

## 【注】

- 1) 京都市教育委員会の管轄下を除く。
- 2) 京都府教育委員会には、府内に次の五つの教育局が置かれている。カッコ内は所在地。

京都府丹後教育局（宮津市）	京都府中丹教育局（綾部市）
京都府南丹教育局（南丹市）	京都府乙訓教育局（向日市）
京都府山城教育局（京田辺市）	
- 3) 山城教育局の「平成18年度 管内要覧」による。
- 4) 山城教育局の「平成18年度 管内要覧」と府教委の「平成18年度 公立学校基本数一覧」による。
- 5) 京都新聞 2006（平成18）. 1. 28（土）「目指せ！府民1000万冊読書」による。

- 6) <http://Kyoto-book1000.jp/>の「年度毎・月毎の読書冊数」から算出。
- 7) 全国比は、2006年版 学校読書調査（毎日新聞社）の調査結果との比較。  
なお、各学年の数値は、男子と女子の単純平均とした。
- 8) 「学校図書館 2006. 8 (No.670)」p.12「市町村別推進計画策定状況（平成18年3月31日現在）」。
- 9) 「学校図書館 2006. 3 (No.665)」pp.54～67。  
資料「市町村別学校図書館図書標準の達成割合（公立）」平成15年度末・文部科学省調べ。
- 10) 京都新聞朝刊（山城版）平成18. 11. 8（水）「図書購入費8倍の開き山城の小学校図書館」。
- 11) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/19/04/07050110.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/04/07050110.htm)  
アクセス 2007/05/10.
- 12) 平成5年4月1日、文部省教育助成局長通知「公立義務教育諸学校の学級編成及び教職員の標準に関する法律及び公立高等学校の設置、適正配置及び教職員定数の標準に関する法律の一部改正等について」。
- 13) 「学校図書館 2006. 11 (No.673)」p.45.

（なかざと・たかのり 2007年5月11日受理）